

スペンサー『教育論』と伊澤修二『教育学』の 内容について

一両者の「三育主義」と心理学的立場の異同を中心に一

油井原 均

…体育は、明治初期に英語のフィジカル・エデュケーションの訳語として作られた言葉だ。身体発達や運動能力の向上などを目的とする教育の一領域を指す。十九世紀の英国の思想家で教育学者のH・スペンサーは、知（智）育、徳育、体育の教育論を唱えたとされるが、日本でも十九世紀末にはこの三つを並べて教育のあり方が論じられている。

学校教育の教科名としては、体術、体操科、体練科と変化し、「体育科」が登場するのは、戦後になってからだ。

（読売新聞記事、2004年10月8日〔ことばのファイル〕体育
スポーツよりも教育的!? より）

上記新聞記事のように、教育を知育（智育）・徳育・体育に分類して論じる「三育主義」がしばしば用いられる。学校の教育目標にも散見されるし、行政・政策文書などとの関連で使用されることもめずらしいことではない¹⁾。

日本において教育を知育・徳育・体育の分類で考察することは、明治初年の欧米の教育関係冊子の翻訳が、そのもっとも早い事例と考えられる。たとえば、1873（明治6）年に文部省より刊行されたチェニバース著（箕作麟祥抄訳）『百科全書教導説』は、その一つとされる。これら「三育主義」と呼ばれる分類法については、人間の調和的発達を重視するペスタロッチ

主義の影響などが指摘されてきた²⁾。

いっぽうで、冒頭記事のように、「三育」はスペンサーの教育論と結びつけられることが一般的になっている。これは、19世紀後半の欧米、とくにアメリカでスペンサーの著作が広範に受容されたこと、明治初期の学校教育形成期にアメリカからの影響で導入された知見が多々みられること、1880（明治13）年にはスペンサーの『教育学』が現在でも参照される尺振八の翻訳でほぼ完訳され刊行されたこと、などが要因として考えられる。後にみるように、この時期の東京師範学校では「教育科ではスペンセルのエデュケーションという本を読ませるのみ」と、アメリカ留学より帰国後間をおかず学校長となった伊澤修二を嘆かせるような状態であったとも伝えられる。

その伊澤は、尺振八によるスペンサー『教育論』翻訳の2年後に、『教育学』を刊行している。その内容については、従来、智徳体の三育主義に基盤をおいており、スペンサー『教育論』と同一の理論的内容との評価が一般的であった³⁾。しかし、森田尚人は、伊澤がアメリカ留学時に記した講義ノートや、伊澤自身が執筆にあたって依拠したと記しているアメリカ留学先の師範学校長ボイデンの著書、さらには伊澤自身が記した講義ノートなどを資料として、従来の評価に実証的批判を加えている⁴⁾。本稿では、森田の議論も参照しながら、スペンサーと伊澤の著作の成立背景と論述内容、それぞれが依拠している心理学的立場の相違などを検討し、先行研究とはやや異なる観点から、スペンサーと伊澤の著作内容の異同を考察してみたい。

1. スペンサー『教育論』について

(1) スペンサーの「総合哲学」と『教育論』

スペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）⁵⁾ は、産業革命の進行のもと

自由主義思想が支配的であった19世紀前半に生まれ、市民階級が台頭するイギリス社会において活動した思想家である。その思想は、当時の最先端の科学であった進化論の影響を大胆に取り入れた独自の「総合哲学」としてまとめられた。彼の思想は、とくに19世紀後半のアメリカにおいて「スペンサー・ブーム」⁶⁾と称されるほどの注目を集めた。「スペンサー・ブーム」は、明治期の日本にも広がり、多数の文献が翻訳され、また明治初期の高等教育機関ではスペンサーの著作がテキストとして用いられていた。

スペンサーの教育に関する議論の特色として、「宇宙のあらゆる存在が進化するとみる動的 세계観の立場から、生物、精神、社会、道徳も進化する」という進化思想の独創的な解釈にもとづくことが指摘されている⁷⁾。スペンサーは国家の教育への関与に否定的であったことも特色として指摘されるが、これも「自由」が個人ならびに社会の生命を維持するために必要な条件とされ、道徳の「進化」の問題⁸⁾と密接に関わるからである。また、記述にあたって、当時の最先端ともいえる哲学的・科学的方法を重視していることもしばしば指摘される。

スペンサーは教育学の専門的研究にとどまらない範疇で自らの思想を形成した。そしてまた、教育実践者でもなかった。しかし、1850年代に「総合哲学」の構築を目指して執筆された多くの論文のうち、教育に関わる主題をもつ4編の論文を雑誌に発表した。それらの論文が一冊にまとめられ、1861年に『教育論』(*Education, Intellectual, Moral and Physical*)としてアメリカで出版された。すでに記したように、『教育論』は、1880(明治13)年、尺振八⁹⁾の翻訳により「当時の思想界に台頭していた「自由」の思潮に乗じて世に出た」¹⁰⁾。翻訳刊行の前年には、いわゆる「自由教育令」が施行され、翌年には統制的内容に改正されている。このような時代状況の影響を受け、スペンサー翻訳書は、1881年には文部省の手により絶版となっている。しかしその後も、他の翻訳者による『教育論』の4種の翻訳

が出版された。そのなかでは尺振八による翻訳が「最も早く翻訳されたものであり、最も多く読まれ、又その訳文が実に名訳である所により特に有名」¹¹⁾とされている。

(2) 『教育論』の構成と内容

ここで、山下の整理を参照しながら、スペンサーがイギリスで雑誌に公表した順序に沿って、後に『教育学』としてまとめられた4編の論文の原題を示しておこう。なお尺によるその訳文も（ ）に示しておく¹²⁾。

- The Art of Education (Education, II) (第二編 心智ノ教育ヲ論ズ)
- Moral Discipline of Children (Education, III) (第三編 品行ノ教育ヲ論ズ)
- Physical Training (Education IV) (第四編 体躯ノ教育ヲ論ズ)
- What Knowledge is of Most Worth? (第一編 何ヲ以テ最大ノ価値アル学識トスルヤヲ論ズ)

現在では「知育（智育）・徳育・体育」という「三育主義」の創始者であるように扱われることさえあるスペンサーの著作だが、雑誌発表時のそれぞれの論文の原題をみると、教育の方法的問題や訓練に関する問題について、独自の進化論に基づく立場を適用した論文内容となっていることがうかがえる¹³⁾。「知育論」「徳育論」「体育論」とされている部分も、学校カリキュラムでの領域・教科目などを前提とした議論ではなく、自身の立脚点からみた訓練・教育への関心から構成されているとみることができる。赤塚が指摘するように、これらの著作は、スペンサーの解釈による進化論的立場を、教育という「特殊な領域」に適用する試みとしてみるべきなのだろう¹⁴⁾。この時期のスペンサーの著作は「一見恣意的と思われるほど極めて多岐にわたっている」が、「普遍的進化の法則を次第に自覚化して、その体系化のために努力した過程」において書き下ろされている、

と考えられている¹⁵⁾。

以下、いくつかの具体例を尺の翻訳による『斯氏教育論』内に確認してみたい。スペンサーが教育を定義づけた有名な言葉として「完全な生活への準備（完全無欠ノ生活ヲ為スノ道）」というものがある。スペンサーは、『教育論』の第1章に置いた論文「どのような知識がもっとも価値があるか（何ヲ以テ最大ノ価値アル学識トスルヤヲ論ズ）」（What Knowledge is of Most Worth?）のなかで、教育の目的と、その目的に資するという面から身につけるべき教育内容の価値について論じている。その際に示されるのが「完全な生活（完全無欠ノ生活）」という有名な言葉である。尺による翻訳では、次のように記されている。

天ヨリ授与セラレタル幸福ノ資本ヲ悉ク使用スル道如何、概シテ之ヲ言ヘバ、天賦固有ノ能力ヲ悉ク使用シテ己ト人トノ為メニ、最大ノ利益ヲ生ズルノ道、即完全無欠ノ生活ヲ為スノ道¹⁶⁾

赤塚をはじめとした多くの研究が指摘するように、スペンサーはあらゆる現象を統一的に説明する普遍的進化論の立場をとった。この立場から、人間の精神的発達や社会形態が「進化」することも「普遍的事実」として説明されることになる。人間の知的発達についてもこの立場から説明され、それは人間が生活の実務に「適応」する過程とされる¹⁷⁾。そのような立場からすれば、「天ヨリ授与セラレタル幸福ノ資本ヲ悉ク使用スル道」である「完全無欠ノ生活」を準備する教育的働きかけの方法および順序も、また普遍的事実である、ということになろう。ここから導き出されるのが、有名な五つの教育内容（領域）である。ここでも尺の翻訳を引用しておこう。

第一ニハ、直接ニ己ヲ保存スルノ道ヲ知ラシムルノ教育、第二ニハ、間接ニ己ヲ保存スルノ道ヲ知ラシムルノ教育、第三ニハ、父母タルノ道ヲ知ラシムルノ教育、第四ニハ、国民タルノ行為ヲ知ラシムルノ教育、第五ニハ、文雅ノ技芸ニ達セシムタルノ行為ヲ知ラシムルノ教育ナリ¹⁸⁾

上記した「教育すべき内容」の順序は、スペンサーの進化論的立場からその重要性が確定され順序づけられている。「直接ノ自己保存」と「間接ノ自己保存」については、スペンサーが引用文の直後に記しているところによれば、生命身体上の安全を確保するような諸活動に関わる知識と、人間社会における生活手段を獲得するのに関わる知識、という意味で用いられている。

スペンサー独自の進化論的立場から、「品行教育ノ原理」とされているのが、その教育思想を論じる際しばしば言及される反復説的発想である。

今夫レ兒子ノ跌キ倒レ、若シクハ其頭ヲ卓子ニ触ルルヤ、必ズ疼痛ヲ記憶スルハ、後來兒子ヲシテ、一層注意セシムルノ一助ト為ル可シ、兒子ハ、之ニ類シタル経験ヲ、時々反復セバ、終ニ能ク挙止ノ正シキ法ヲ習知スルニ至ル可シ¹⁹⁾

この記述の後に、ロウソクの火などに触れて火傷をしたりすることが道徳的教訓となるという事例が紹介されている。子どもの行為の結果として生じる「自然の反作用(反復)」が行為に道徳的意味をもたらすという内容である。赤塚は、このような方法について「快苦が行動を判断する基準であり、その苦痛は先行する行為の不可逆な結果である」と端的な要約を行っている。この方法の背景には、スペンサーが受けた功利主義的思想からの影響を確認できる。また、この方法によるかぎり、親や大人は過剰な叱責・手出しをできるだけ控えるのが望ましいということになり、過度の統制を避けるという自由主義的な立場につながっていくことになるだろう。

(3) スペンサーの依拠する心理学的立場

上述した部分にも示されている、外界の物質などに触れることと「自然の反作用」により価値観の獲得過程を把握し、さらにそれらを生物的進化の過程として描くという考え方の背景には、スペンサー自身が創案し依拠

した心理学的立場が示唆されている。スペンサーのこのような心理学的立場は、赤塚などによって、心的活動の要素の連合によって精神現象を説明しようとする連合心理学派の流れに位置付くと指摘されている²⁰⁾。当時の先端的な学術的影響のもと心理学的な立場に依拠した教育論を記した、という点では、後にみる伊澤の『教育学』とも共通していると言うこともできるだろう。もっとも後述するように、心理学的な立場としては、スペンサーと伊澤の学問的立場は異なっていたと考えられる。

「品行（徳育）」にかかわる部分では、親（大人）についての言及が多くみられる。そのことは、スペンサーが学校教育を直接の対象として教育を論じているわけではないことも示している。むろん、当時のイングランド社会におけるパブリックスクールなどの教育については、とくにその教育内容・方法などの側面から、スペンサーは批判的な記述を行っている。しかし、全体としては、先述したように、総合進化論的な立場を教育という営みに適用していると判断できる。なお、今日の常識では進化論を代表する人物としてダーウィンがすぐ思い浮かぶが、スペンサーの進化論的発想は、当時のドイツの動物学者ベアの説に由来する、とスペンサー自身が書き記していることを附言しておきたい²¹⁾。スペンサーにとってダーウィンの説は、自身の発想を科学的に裏付けるものとして認識されていたように思われる。

2. 伊澤修二『教育学』について

(1) 伊澤修二の来歴と『教育学』執筆経緯

伊澤修二は江戸時代末期（嘉永四年）に信州高遠に生まれた。明治維新を18歳で経験し、大学南校を経て文部省官吏となる。その後、師範学科取調のため、1875年より3年間のアメリカ留学を命じられた。帰国後は、官僚としての役職を務めながら、教育学理論の紹介・教科書編纂などに従事

した。音楽教育・吃音矯正などの分野で活動し、また国家有機体説の影響のもと国家主義的立場に立って国家教育社を設立し、初代台湾学務部長として植民地教育にも密接に関わった。

伊澤の著作『教育学』は、1882（明治15）年に出版された。この書は「日本で初めて教育学という言葉を使用した著作」とされる。伊澤は、留学を命じられたブリッジウォーター師範学校で「教育ノ学に従事」した。当時、師範学校長ボイデンが生徒に「心理学及教育学ヲ講読」しており、それを聴講する機会を得た。『教育学』は「随聴講記スル所」を冊子としたもの、と伊澤はその冒頭で述べている。『教育学』は、当時の学校教員の「指針」となるよう、伊澤自身が学んだ心理学と生理学などからくる知見をもとに、教育の概要を論じたもの、ということができるだろう。

森田尚人によれば、この時期のブリッジウォーター師範学校は、「専門職としての教員養成を掲げた師範学校運動のなかで、指導的な役割を果たし」ていた。森田はこの師範学校の特徴として、福音主義信仰にもとづく教育改革を担う機関でありカリキュラムを越えた人格的影響をも重視していたこと、教育内容として科学、とくに自然科学系科目を重視していたこと、小学校教員養成課程と中等学校教員や教育専門家養成課程を併設する方式に代表される職業的専門性重視の傾向が強かったこと、の三点をあげている²²⁾。

先に記したように、伊澤の『教育学』刊行の2年前には、スペンサーの『教育学』が尺振八翻訳により刊行されていた。伊澤は英語に堪能であったから、もとより翻訳ではなく原著を読んでいた可能性も高い。伊澤が日本の初期教員養成に指導的立場で関与していたことを考えると、スペンサーの著作が必ずしも当時の学校教員にとって十分な内容を提供していない、との彼の判断が、『教育学』刊行の背景としてうかがえるように思われる。回想ではあるが、伊澤自身も後に次のように語っている。

従来同校（引用者註：東京師範学校）の教育方というものは、唯々本を生徒に読ませるといふ一点に止まり、人を教ふる方法如何とか、眞の知識を得る方法如何とかいふことは、更らに考慮せられなかつたのである。故に教則上の文字こそ外国の師範学校のそれを真似たれ、教科ではスペンセルのエデュケーションといふ本を読ませるのみ、其他博物物理化学等の諸学科に於て、何れも単に本を読めば足るとして、事物の眞の知識を得る方法、及これを人に伝える方法などは、更らに教えられなかつたのである²³⁾

…米国に留学し、ブリッチャートル師範学校で始めて正則の師範教育を受け、正則に教育学の講義を聴いて大に悟る所があり、帰朝して今の東京高等師範学校の前身たる東京師範学校長となつた時、生徒に講義したものを集めて、『教育学 学校管理法』の二書として世に公にした²⁴⁾

また、『教育学』の緒言には以下のように記されている。

余帰朝ノ後、偶々東京府下教員等ノ懇請アルニ会シ、乃者（さきに）筆記セシ題目ニ基キ、傍ラ諸書ヲ参考シテ、心理学上ヨリ教育ノ大要ヲ講述シ、以テ諸子ノ望ヲ満シタリキ

本邦未ダ心理及教育ノ学ニ基キテ、教育ノ理ヲ説キタル、著書アラザルヲ以テ、世ノ教育ニ志ス徒ノ為、聊（いささか）其指針タルノ用ニ供セントスル（引用者後略）²⁵⁾

以上、伊澤自身が記しているように、『教育学』は、当時の教員（師範学校生徒）を対象としたテキストとして執筆された。また、伊澤が教員に「事物の眞の知識を得る方法、及これを人に伝える方法」を伝えることを意図した冊子でもあつたと言ふこともできよう。

(2) 『教育学』の構成と内容

すでに述べたように、森田により伊澤の留学時の筆記ノートなどを資料とした詳細な実証的研究が行われている。ここではその内容も参照しつつ、とくに『教育学』執筆理由や「三育」に関わる記述、および記述の背景となっている心理学的立場などについて、スペンサー『教育論』との比較も視野に入れつつ若干の考察を試みたい。

『教育学』本文は、冒頭に「総論」を置いて、教育という言葉を定義するところから始まる。

教育トハ人ノ心カト体カトヲ育成シ、其諸カヲ正道ニ応用スルノ才能ヲ得セシムルノ謂ニシテ、即チ完全ナル人物ヲ養成スルノ術²⁶⁾

この引用部分の直後には、「精神上ノ教育」「身体上ノ教育」の二分法が示され、さらに前者が「専ラ智心ノ教養ニ関スル」智育と、「専ラ徳性ノ教養ニ関スル」徳育に二分されている。「心力」を二分した智育・徳育と、体力より導かれた体育は、簡潔かつ分析的な記述で記述されている。さらに、智育・体育は「心理学ノ論ズル所」であり、体育については「体育学ノ専科ニ属ス」とされている²⁷⁾。そして、このように示された三育（智育・徳育・体育）について、以後の記述でそれぞれの「大要を論述」という全体構成となっている。

以上のような「三育」を導き出す記述に典型的なように、伊澤の記述はきわめて分析的であり、当時の水準において科学的であろうとの意図も強く感じられる。第二編以下も、基本的には概念を定義し、他の概念との比較を行いながらその内容を論じていく記述で一貫している。森田が詳細に分析しているように、このような記述態度には、アメリカ留学時に大きな影響を受けたボイデン、さらにボイデンが講義などで依拠したハミルトンに代表される19世紀スコットランド常識学派の哲学・心理学の影響が認められる²⁸⁾。また心理学的立場においては、この時期の伊澤は、J・S・ミ

ルやハートリーに由来する連合心理学の影響を独自に展開させたスペンサーとは異なる立場（系統）に位置づくとともに判断できる²⁹⁾。

伊澤の『教育学』内の記述について筆者が興味をひかれるのは、具体的な教育方法についての記述がわずかしかみられないことである。たとえば、「智育」の「第二章 表現力」は「外覚性」「内覚性」「表現力ノ定義ト教育上ノ価値」「五官教養ノ法及其要ヲ論ズ」「結論」からなる。「外覚性」の冒頭に「外物ノ心ニ表現スル方法」という項目があるが、「外物ノ心ニ表現スル法ハ、其物ノ機器トノ位置、恰モ心ニ衝動ヲ与エテ、之ニ一種ノ変化ヲ生ズベキ関係ヲ有スルヲ要ス」と心理学的記述がなされた後、「心ト機器、眼ト物書トノ関係」が図として示されており、心理・生理学的な記述に終始する。具体的教育方法と関連する記述もまれにみられるが、その多くは、以下のような記述内容である。

外覚性ハ諸心力中最初ニ旺盛ナルモノナリ。故ニ外覚性ノ教養ハ、幼児ニ於テ最緊要トス。其教養ノ法ハ、諸種ノ物性ニ接セシムルニ在リ。諸種ノ物性ニ接セシムルハ、実物教授ニ非レバ能ワズ。是レ実物教授ノ幼児ノ教育ニ緊要ナル所以ナリ³⁰⁾

伊澤は留学経験などを通してペスタロッチの所論に接している。そのため、ここでの「実物教授」という言葉は、ペスタロッチ教育学の影響とも考えられる。しかし、学校における教育方法を強く意識した記述というよりは、より一般的に、幼少時の具体的事物と接する重要性を述べた内容に思われる。むしろ、学校を意識した記述もみられる。たとえば、「德育」は六章の部分からなるが、「第四章 情款」には「学校ニ於テ友愛ヲ養ウノ法」として、次のように記されている。

父子相愛ノ情ヲ拡充シテ、兄弟姉妹ヨリ遂ニ朋友ニ及ボスモノ友愛トナルナリ。友愛ノ情款ハ、互ニ相識リ親シク相交ワルモノノ間ニ發生スルモノナレバ、学校ニ於テ之ヲ養成スルコト決シテ難キニ非ズ。

故ニ教育者ハ、或ハ炉邊ニ団欒シテ談話ヲ催スノ時ニ際シ、或ハ遊歩場ニ携手同遊スルノ機ニ投ジ、其校友ノ情ヲ厚スルノ方向ニ誘ウコトヲ努ムベシ³¹⁾

学校などでの場所と機会を提供する工夫と、そのような方向に誘うことをすれば「友愛」に至る、という内容を述べている。ただ、このような記述はごくまれであり、大部分は当時の心理学的知見に基づく概念の定義とその分析的記述に費やされている。

「体育」に際しては、まず食物による栄養摂取、衣服や住居についての注意等が述べられる。その後、「第三章 運動」が置かれている。ここでも「運動」が「自由運動」「規定運動」に大別され、自由運動はさらに、歩行や乗車などによる「一般運動」、跳躍奔走乗馬などによる「急劇運動」、蹴鞠や泳法など様々な運動からなる「雑種運動」に分類される。「規定運動」については、「学校ニ於テ一定ノ規律ニ依リテ施ス」体操などが該当するとされ、徒手演習・器械演習とさらなる分類が示され解説されている。「体育」の最後の章は「静息」であり、休憩と睡眠の重要性を解説して終わる。それぞれの運動の紹介に止まり、それをどのように学校で実践・実施していくかという記述はみられない。

なお森田によれば、伊澤は『教育学』を執筆するにあたって、ハミルトンの影響を強く受けたホプキンスの著作に多くを依拠していた。ハミルトンはスコットランド常識学派に属し、師であるリードの学説とドイツ哲学、とくにカント哲学との間に親近性を見いだしていた。先述したように心理学史的な観点からみて、伊澤はスペンサーとは異なった立場の心理学に立脚して、その教育論を構成していたとみることができる。

3. まとめにかえて

ここまでみてきたように、伊澤の『教育学』は、実際のあるいは具体的

というより、教員・教育関係者を対象とした、より理論的な教育概念の概説という性格をもっている。この点で、自身の進化論的総合哲学の教育への適用を、具体例も含めて論じようと試みたスペンサーの『教育論』とは、その目指すところ自体が異なっていると判断できる。目的の違いは内容・行論の相違にもつながっているとみることができるだろう。

自身の「総合哲学」体系形成過程に教育面への適用の試みとして執筆されたスペンサーの著作と、近代学校の導入にあたってアメリカで「教育ノ学に従事」した成果を教育関係者に科学的に伝えようとした伊澤の著作とは、各々の目的に応じて論述される内容形態が異なっているのは、ある意味当然のことではあろう。吉田熊次による『教育学』の解題では、伊澤の『教育学』は「確かに当時の教育界に学的光明を与えた」³²⁾と記されている。この「学的光明」という表現は、教育関係者に科学的教育観を示そうとした、と解釈できるように思われる。

さらに、両著作とも、当時の科学的・心理学的知見に基づく内容であることが確認できる。これも吉田が解題で述べるように「伊澤氏の教育学は大体に於て心理学的教育学に属するもの」³³⁾である。この点に関しては、独自の立場から進化論的心理学を構築したスペンサーも同様と述べている。しかし、その依拠する心理学の立場（系統）は、スペンサーと伊澤では異なっていることも、その著作の背景や内容などから確認できる。そのことが両者の著作内容の異同に関わっていることも指摘できるだろう。

なお、伊澤は『教育学』刊行の8年前、1874（明治7）年の愛知師範学校の開業式において、次のように三育の分類を用いたと伝えられている。

抑今日ノ教育ハ大ニ古ノ教育ニ異ナリ、惟一般ニ講読吟詠習字等ヲ指シテ教育ト云ニ非ズ、之ヲ要スル均シク身体才智心気ノ三者ヲ教育シ、不偏不倚ノ良材ヲ得ルヲ以テ其目的トス³⁴⁾

この内容にみられる「身体才智心気」の偏りのない発達を述べる記述か

らは、『メトデー』等で有名なペスタロッチ、およびその影響下にあるページなどからの影響がみてとれる。伊澤がかなり早い時期から三育を分類する考え方を知っていたことが示唆される。しかし、森田が指摘するように、『教育学』における伊澤の筆致には、ペスタロッチ教育学の影響がほとんどみられない³⁵⁾。伊澤の「教育」への視点とその定義がどのような変化をし、その実践と普及とどう関係していたのかについては、後の国家主義的な活動などともあわせて考察する必要がある。また、伊澤の『教育学』に寄せた西周による序文には、「三育之説、為泰西近日之定説、余曰是古之道也」との文言がみられる。「三育」が教育関係者にどのように普及し、現在のように学校教育と関連させて使用されるに至ったのかについても、今後の課題として考えたい。

近代日本の実験心理学者の嚆矢となる人物である元良勇次郎は、スペンサーの逝去時に「心理学者としてのスペンサー及ペイン」を執筆している。彼は、論文中に「スペンサー及ペイン後の心理学」という見出しを付して、「スペンサー及ペインは英国の連想学派を代表せるもの」としつつ、「英国の心理学者中に於ても批評する者あり、独逸の心理学者及亜米利加の心理学者は大に之に反対せるものあり」と続けている³⁶⁾。スペンサーとペインの心理学については「精神現象を一般科学と平等の位地に立たしめんとした」ことも指摘しつつ、その立場が学問的には過去のものになっていることを示唆する文章となっている。ここでの元良の指摘は、スペンサーだけでなく伊澤の心理学的立場についても通じるように思われる。両者の依拠した心理学は、19世紀を通して試みられた「心理学の科学化」の潮流のもと、いずれも過去の学説とみなされていったと考えられるのである³⁷⁾。

* 註記

- 1) たとえば、1970年代後半の学習指導要領改訂では「知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童生徒の育成」といった表現が用いられた（「昭和五十二年の小・中学校の教育課程の改訂」文部科学省ホームページ：学制百二十年史よりhttp://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318313.htm：2016/9/20閲覧）。
- 2) 小林一久「体育と徳育：明治13年前後を中心にして」『一橋大学研究年報 自然科学研究』13、1971年など。
- 3) 代表的な研究として、尹健次「明治前期国民形成論の展開—伊沢修二の教育思想にみるその一研究」日本教育学会『教育学研究』49巻2号、1982年がある。
- 4) 森田尚人「伊沢修二の『進化原論』と『教育学』を読む——明治初期教育学と進化論——」滋賀大学経済経営研究所『彦根論叢』第383号、2010年。
- 5) スペンサーの生涯やその主要な活動、思想的特質と日本社会への影響などについては、山下重一『スペンサーと日本近代』御茶の水書房1983年、赤塚徳郎『スペンサー教育学の研究』東洋館出版社1993年、によった。
- 6) 山下『スペンサーと日本近代』序論。
- 7) 赤塚『スペンサー教育学の研究』9頁。
- 8) 赤塚、同。
- 9) 尺振八（1839-1886）は江戸末期から明治初期にかけて活動した洋学（英学）者・教育者。共立学舎の創設（1870年）でも知られている。海後宗臣は「尺振八氏は英語には殊に非常な才能を持って居たのであるが、本書を訳するにあたっては（引用者略）その意味が不明なるもの、或は疑義ある所のものは凡てこれを原著者スペンサーのもとに文書を以て質し、これに基いて翻訳を進めたものであるとのこと」と記している（海後宗臣「解題」『明治文化全集』第十八巻教育編、日本評論社1968年、34頁）。本稿では、スペンサーの論述内容の引用等を尺の翻訳である『斯氏教育論』（国会図書館デジタルコレクション所収）によった。
- 10) 海後宗臣「斯氏教育論解題」。引用は前掲『明治文化全集』第十八巻教育編、33頁。
- 11) 海後、前掲書、34頁。
- 12) 山下、前掲書、39-41頁。
- 13) この点については、20世紀後半のスペンサー『教育論』の翻訳者も部分的に指摘している。スペンサー（島田四郎翻訳）『教育論』玉川大学出版部1981年所収の「訳者解説」27頁などを参照。
- 14) 赤塚、前掲書。
- 15) 山下、42頁。なお山下は、上述した教育に関係する論文について、以下のような訳語を与えている。
 - The Art of Education：教育技術
 - Moral Discipline of Children：子供の道徳的訓練
 - Physica Training：身体的訓練

- 16) スペンサー (尺振八翻訳)『斯氏教育論』,1880年、17-18頁 (国家図書館デジタルコレクション内 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/808606> : 2016/8/28閲覧)。
- 17) 赤塚、61頁。
- 18) 前掲、国家図書館デジタルコレクション『斯氏教育論』17-18頁。
- 19) 『斯氏教育論』、前出デジタルコレクション281頁。
- 20) 赤塚は「進化論の心理学」と名付けている (赤塚、106頁)。
- 21) 山下、39頁。
- 22) 森田、前掲論文13-14頁。
- 23) 『楽石自伝 教界周遊前記』44頁。引用は伝記叢書23 (大空社1988年) によった。
- 24) 同上、297-298頁。
- 25) 伊澤「緒言」『教育学』。引用は前出『明治文化全集』第十八巻教育編によった。
- 26) 伊澤「緒言」『教育学』所収。『明治文化全集』第十八巻、462頁。
- 27) 森田は、ボイデンの講義をもとに記述されている『教育学』に、ボイデンの講義になかったと思われる「体育」を加えたことを伊澤の独自性として評価している。森田前掲論文、24頁。
- 28) 森田、25-26頁。
- 29) 近代日本の心理学を創始したとされる元良勇次郎 (1858-1912) は、スペンサー (とアレクサンダー・ペイン) 以前の心理学の「代表者」として「蘇格蘭に於けるハミルトン、及英国のゼームスミル」をあげて、「ハミルトンとミルは其立脚地を異にし、其後の世界の心理学に於ける二大立脚地を代表しつゝ、あ」としている (元良「心理学者としてのスペンサー及ペイン」哲学会編『哲学雑誌』19巻206号、金港堂書籍1904年、43頁)。
- 30) 伊澤、467-468頁。
- 31) 伊澤、487頁。
- 32) 吉田熊次「教育学解題」引用は前出『明治文化全集』第十八巻、39頁。
- 33) 同上、同頁。
- 34) 「愛知師範学校開業式」『愛知週報』第78号附録、1874年。(尹健次、前掲「明治前期国民形成論の展開—伊沢修二の教育思想にみるその一研究」『教育学研究』49巻2号より重引)。
- 35) 森田、27頁。
- 36) 元良、註29) 掲載論文を参照。
- 37) サトウタツヤ『方法としての心理学史』新曜社2011年などを参照。